

特撮怪獣の泪よ、何処へ



—前編—

第一話　＜ 初恋怪獣の涙？ ＞

——その瞬間、顔の半分が吹っ飛んだと思った。

わたしは、重く、熱くなる顔面を抱え込んだままその場にしゃがみ込んでしまいました。

「立て、立てよ、瀬崎！」
助監督の厳しい言葉が飛ぶ。

しかし、わたしの顔面はまったく持ち上げられなくなっていました。

着ぐるみをきた“U”の中身であるA氏の視野は、殆どないに等しい。

“U”は地球上で3分の命だが、中身の人間のほうは、実は、1分ともたない。

“U”のスーツは厚手のダイビングスーツで、皮膚呼吸ができないうえ口元の空気穴がカメラにばれないように無いに等しい。

そんな過酷な状況の中で撮影は進められ、殺陣師K氏のつけた動きに従って左足を蹴り上げたただけだった。

しかし、その“U”の蹴り上げたつま先が、不運にも、怪獣の首元にあるのぞき窓兼空気穴の“シャ”を突き破ってわたしの右目に突き刺さってしまったのだ。

立ち上がれない！！

着ぐるみが剥ぎとられ、わたしは病院に運ばれた。
「来るのがあと30分遅れていたら失明していましたよ」

そう医者に言われました。

しかし、そのときのわたしには、その言葉が不思議と、安堵の響きに感じられたのです。

水の合わなかった業界と、これですっぱり縁が切れる。

わたしが続けられなくなった残りのカットを、代わりに、あの口うるさい助監督が替わるようになった。
が、怪獣らしい動きがまったくできず、結局残りのカットは編集でまかなわれたと聞いた。

数か月の安静を告げられ、わたしは意を決して事務所向かい、そこで、この仕事を辞めて郷里に帰りたい。と伝えた。

すると事務所は、「契約違反で違約金を支払わなければならない」という理由で、それまで「U」の特撮にたずさわった約3カ月間のギャラは、1円も支給されることはありませんでした。

業界に飛び込んで約2年の間、月平均1週間程度の仕事と、3万円に満たないギャラの生活で（この頃からサラ金に手を染め始めていた）初めての、まとまった収入を手にとれると思っていたその全てが、泡のように消え去ってしまったのです。

「そんな契約があったんだ??？」

「しかし、しかし……だからこそ、それならそれでいい!!」

このとき、わたしの入っていた第3話の失恋怪獣「ホー」が…
…、スタントマンに憧れ、親をはじめあらゆる反対を押し切って飛び込んだ芸能界で夢破れた……、自分に重なって見えました。

第二話 <夢はハリウッド?>

それより遡ること半年ほど前のこと。

事務所からの仕事が続絶えがちで、(8時だよ全員集合!・仮面ライダーのショッカー役などで出演)月のギャラがほとんど無い日が続いていたそんなある日のこと。

家賃1万円のアパートの部屋に訪ねてきた事務所の先輩に、突然、こう告げられました。

「円〇プロが、日米合作の映画を撮ることになって、そこに登場する白いゴリラのオーディションがあるからおまえ受けてみろ!」

それは、「アイボリーエイプ」という白いゴリラをめぐる話で、撮影はバミューダという島でのロケだという。

おまけに出来上がった作品は日米で放映される予定である……と。

中学生の頃から夢見た映画のアクションスターへの道。それがいきなりバーンと目の前に用意されたように感じました。

そしてオーディションの当日、監督並びにプロデューサー。それにゴリラ製作者など数名の強面の審査員の前で、自分の得意技を見てもらい、質問を受けてそれに答える。

数時間後、2名の名前が呼ばれ、そこにわたしの名もありました。

最終的な合格者は後日発表されることになり、それからの数日間というもの、我ここにあらず……隣は何をする人ぞ。バイト先の手に持つトレンチも危うく落としそうになる毎日でした。

こうして結果発表のその日の夕刻、決められた時間に明日のスケジュールの確認の電話を入れる。

なかなか電話が繋がらなかったように思い起こす。

暫くあって「あっ、瀬崎くん。おめでとうー、受かったよ！！、、」そのあとの言葉はほとんど聞こえていなかったのだろう……何も覚えていない。

あー、夢のハリウッドの舞台が今、自分の足元に用意されようとしている！！

……とかなんとか、とにかく足元が空中高く持ち上げられてゆく感覚は覚えている。

それから上野動物園のゴリラの檻の前で過ごす日々があって…
…数ヵ月後、わたしは羽田空港にやって来ておりました。

ここは……4年前、高校に入学して間もない16歳の夏に、九州の田舎の町から大都会に憧れて家出してやってきた、その場所でした。

「いつか、ここから飛び立ち、世界中を巡る仕事がしたい！」と願った16歳のわたしは、このとき、20歳になって同じ場所に立っていました。

第三話 <バミューダトライアングルの謎>

高度一万メートル。

天上に、宇宙を感じるほどに深い青が迫っていた。

眼下に広がる黄金色に輝く雲海は、まるで砂漠の中に広がる巨大な宮殿を舞台に語られる遙か遠い昔の、お伽噺の世界を覗き込んでいるようだった。

自分は今、そのメルヘンの世界へ向かっているのだ……。

と、このとき機内のなかで描いた白昼夢が、夢でないとか確かめられるものが欲しかった。

「アメリカへは観光ですか？ それともお仕事ですか？」

そう尋ねてきたのは、同席していた六十歳くらいの紳士でした。

「はい、バミューダ島まで映画を撮りに行くんです」

——と、そういう言葉が勝手に出てくる自分に驚きながら、ジェット機で世界を飛び回る人たちと肩を並べて、今、自分は同じ場所に居るのだ。というその事実すら、今思えば、足元のおぼつかない空の上での出来事だったのです。

こうして太平洋を横切り、アラスカを経由してアメリカ大陸を縦断しながら、そのあまりの広大さに、自分の住んでいる場所のなんと小さいことかと思ひ知らされながら、機はいよいよ、ニューヨークに到着しました。

しかし、あこがれのニューヨークの地を踏むことはなく、同じ空港内の建物の中で、バミューダ行きを待つことになりました。
(このとき、この後のスケジュールにアメリカ滞在は予定されていませんでした)

バミューダ行きの機内は、日本人どころか、アジアの匂いを漂わせているのが自分ひとりだということを、機内を埋めた西洋人の視線に感じないわけにいなかった。

こうして何時間かを、小型のプロペラ機に激しく揺られながら、機は次第に機首を下げて、雲を抜けたそこに――、見渡す限りの紺碧の広がりが見えました。

それが……、大海原であることを教えてくれたのは、そこに浮かんでいる真っ白な宝石のような島影でした。

そのとき「……バミューラー」のアナウンスとともに機内に歓声が上がりました。

島は、見渡す大海原に、ポツンと、たった一つで浮かんでいました。

なんて、美しい島だろう！！

島へ降りると、輝く陽射しは真夏のように、日本の秋の気候に合わせたスーツはあまりにも似合わない過ぎだったことだろう。

“SESAKI、と書かれたプラカードを持った現地の女性の車に案内されて、海沿いの町のなかを走ると、家々の壁は鮮やかなパステルカラーに彩られ、屋根は白一色に統一されていて、いつかTV番組で見た地中海のリゾート地のようなでした。

そして、町を歩く人々の半数がアフリカ系と思われる黒人の人たちで、そのコントラストが、互いを強烈に引き立て合っていました。

バミューダトライアングル……、
魔の三角地帯と称されるその場所は、日本で思い描いたイメージとはまるで違う、たいへん長閑な美しい島でした。

第四話 <幻の “T. I. A.”>

撮影が始まると、とにかく日本人スタッフの中で（一応主役でありながらも待遇はSTAFFでした）一番英語の分からない自分は、身ぶり手ぶりだったのですが、むしろ外国人スタッフとのコミュニケーションはスムーズでした。……しかし英語の話せるスタッフは、しょっちゅう、アメリカ側のスタッフや現地のスタッフとギャラのことや時間のことで揉めているようだった。

しかも、アメリカスタイルなのかバミューダスタイルなのかは知らないが、とにかく休憩時間が多い。そのうえ、昼からステーキの食べ放題。休み時間は、昼食の残りのハムやチーズを餌にして釣りを楽しむのですが、これがまたカラフルな熱帯魚の入れ食いで、なかには 20リットル缶を浮きにして「大物を釣るんだ！」とはしゃぐスタッフなんかもいて、皆は大いにエンジョイしていました。もちろんわたしも……。

ところが、日本の撮影班でそのなかに交わる人はなく、冷やかに、背中を向けている姿しか記憶に残っていません。

わたしの入るゴリラの着ぐるみは、アップショット用とロングショット用の二種類があり、アップショット用は70kgを超える重さで、それを着けて動き回することは怪獣どころの話ではなかった。

それが “THE ^ザ IVORY ^{アイボリー} APE ^{エイプ}” なのである。

また、この作品は、映画になることを想定して35mmフィルムが使用されると聞かされた。

このアップショット用のゴリラの最大の見せ場は、作品の冒頭部分にくるシーンだった。

——その日、撮影現場には何台かの消防車が出ていて、放水をし

ながらのテストシーンが繰り返された。

この日の撮影は、その1シーンのためだけに用意されていたと記憶しているが、定かでない。

監督は、かのY・百恵／M・友和主演の映画を撮ったと自慢されていた日本人のT・K監督だった。

「よーし、瀬崎ちゃん準備して――、木に登るよ！」

その日の朝から出張っていたわたしに、やっとゴーサインが出ました。

着ぐるみを着る何時間も前から、メーキャップのニックさんに目のまわりのメーキャップをしてもらって準備は整っていました。

このゴーサインとともに真っ赤なコンタクトレンズを目のなかに装着する。

ニック
さん



このコンタクトレンズは、当時では珍しい色つきの大型のハードレンズで、わたしの眼球そのものがすっぽりと見えなくなる。

しかし「三十分以上付けていると失明する危険性があります」と医者から注意を受けていた代物でした。

一番の見せ場だと聞かされていたその撮影シーン。

台本には、＜ゴリラの毛深い姿がシルエットを描き、落雷の中に真っ白に浮かび上がる＞みたいなことしか書かれてなかった。……から？ のに？——、いきなり木に登って！！

ちなみにこのゴリラ。重さもさることながら、わたしの腕の二倍も長いその先に付いている指は、わたしの握力をマジックハンドで伝えて開いたり閉じたりさせるような仕組みでした。

「……監督？ それはないですよ！」

とは言えない。

ゴリラの中でそう愚痴りながら、必死に木にしがみつこうとしている姿はどんなんだったのだろう……？

出来上がった映画よりもそっちのほうを見たい気もする。

木に登れないことを監督に理解していただけるまでにどれほどの時間があつたのだろう……。

それとも、私の記憶が、このときの出来事をそのように変えてしまったのか？ それはおそらく、Y・百恵&M・友和と、` IVORY APE、との接点を見つけようと試みたことが原因だったのだろう。

とうとう、サナギの中から這い出すようにわたしだけが木に登り、スタッフの手を借りて蛻けのゴリラを引き上げて、足場のない木の股でスタントマンよろしく、その身をふたたび殻の中に潜り込ませる。

その、ありったけの力と気力を使い果して成し遂げた脱着作業が終わるや否や、

「はい！　そこでバナナの房を抱えて食べるシーン。行くよ！
——」

ジャングルの中で、監督しか見えなくなった。

「はい、よろしくお願いします！！」

監督の指示に対し許されている返事はそれしかない。

70 kgを必死に持ち上げ危うい足場の上での格闘的なテストが続く――、

そしていよいよ本番、

――雨の中のジャングルで、世界で初めて発見された成長した白いゴリラ“T. I. A.”がバナナを食べているようなシーン。

待ち構えていた消防車から一斉に放水が始まり、ストロボ効果の落雷が瞬く。

わたしの周囲が激しい放水シャワーで真っ白になって行く。

そのとき、カメラの回りだすかすかな音が、張りつめた空気の中に聞こえた……気がした。

「はい、本番……、3・2・1、 アクション！」

わたしは夢中でテスト以上のオーバーアクションをこころがけた。

自分では思いっきりやれていると思っていた……その時だった、

「あっ、駄目だ、雨が赤くなってきちゃった！　中止中止！！」

それは監督の言葉ではなくカメラマンの発した言葉でした。

このときの衝撃は、今も生々しく記憶に刻まれています。

当然、監督もこのカメラマンの言葉には激怒しました。

しかし、このカメラマンも相当にベテランらしく、監督とまともにぶつかっても、「ここで、雨が赤くなったんじゃ絵にならないんですよ！！」みたいなことで一歩も引くことはありませんでした。

このシーンは結局それ以上進められず、そしてその後、このシーンがどうなったのかを知らされました。

それは、1ヶ月間の撮影が終わり、急遽、撮り直しのシーンがないかのチェックが必要になり、わたしも一緒にニューヨーク行きとなったのでした。

しかし、その撮影されたラッシュの中に、そのシーン^{*1}は見当たりませんでした。

今思い返せば、(もちろん、自分の演技など恥ずかしくて見てもらえないのですが)、この作品がアメリカの正月TV番組になっただけで(……と、聞いた)、日本に来なかったのは、なんとなくうなずける気もするのです。

しかしそれも……、今となっては良い思い出。

当時の私には、夢の中の出来事も、現実の事も、その違いがはっきり認識できないような状態で、やはり、地に足の届いていなかった、幻のような出来事であったのです。

*1 近年、ユーチューブ動画で「THE IVORY APU」を見つけ、そのようなシーンがありました。

しかし、ここに描写しているほうがリアルです。

第五話 <夢のニューヨーク>

——という訳で、とうとう憧れのニューヨーク、マンハッタン島へやって来たのだ！！

その街のなんと大きいこと。

当時、人口密度で世界一だった東京が世界で一番大きい街だと思っていたら、マンハッタン島の摩天楼はその二倍はあろうかと思われる規模で、しかも建物のほとんどが歴史感漂う石造り。その高層石造りの深い谷間は、どこかで耳にしたフレーズ、そう…… “セピア” というイメージにぴったりと合う雰囲気でした。

わたしはその大きさと、色彩と、さまざまな人種の入り交じる人波に圧倒されながら、ニューヨークの街中を、酔い痴れるように彷徨い歩きました。

ブロードウェイ、五番街、タイムズスクウェア、セントラルパーク、ダウントOWN、裏通り……。

ホテルに戻ると、スタッフから、

「よくそんなところを一人で歩いて、無事だったね？」と言われ、「ビルの裏通りは犯罪が多発している場所で、観光客は特に狙われやすいのだから、絶対に通らないで！」と注意されてしまいました。

……しかしそう言われても、その危険性が理解できないわたしは、相変わらず物珍しものを探しに出歩いておりました。

そのとき季節は11月の初め頃で、バミューダー島ではまだ泳ぐことのできる気候だったのですが、ニューヨークは、道行く人の多くがコートを羽織る時期で、そんな中を、短パン半袖ゴム草履で闊歩するアジア人は……、少し危険な臭いに満ちていたのかもしれない。

ニューヨーク滞在の一週間は瞬く間に過ぎてゆきました。

『将来必ずまたここへ来よう。そのときは自費で、自分の仕事で来よう！』と、そう心に誓いました。

第六話 <ハリウッドスターとの一時>

約40日間の日程を終え、前の職場の先輩のところに報告に行くと、その先輩から驚くべき事実を聞かされました。
なんと……その作品に、アメリカで有名なハリウッドスターと一緒に出演していて、わたしに、その俳優さんが——、(作品中で身につけていたベストを、わたしがあまりにも褒めるもので、その方が出演シーンの全て撮り終えた後に、「リトルモンスターに・・」そう言ったかどうかは定かではありませんが……、)「プレゼントしてくれ、」といって衣装担当のエリザベスさんに預けてくれていたのです。

そのベストと音ちなバカ



まさかそんな有名な人だったとは！
サイン一つ貰っていなかった……。

「おまえ、ホンとバカだな！ 日本人で共演できた奴なんて、たぶんおまえが初めてだったろうに！」

「え～～？！」……

たぶんそんな会話で盛り上がったのですが、ただ……しかし、その時までのハリウッドスターとの一番の思い出は——、

「セサキ、ジャック・パランスに紹介するから来いよ」と言われて、プロデューサーと監督に連れられて行ったのがバミューダーのディスコで、そこで紹介して頂いたのが、厳ついが、優しい笑みを湛えた……その人で、

「オオー、リトルモンスター！」（ちなみに当時のわたしの身長は180cm超えだったのですが）と言って、そのぶ厚い大きな手のひらで優しく握手して一緒に踊ってくれた、……そのことよりも、助演のフランスの女優セリーヌと踊った一時があまりに圧巻過ぎて……、おまけに本当に馬鹿なわたしは、その後、ジャックの着ていたベストを……、衣装担当のエリザベスさんを通じてプレゼントして貰ったそのベストを――、無くしてしまったのです!!

――ああー、その人こそ、
かの「シェーン」の悪役を演じたその人だったのです。

わたしはその後しばらく経って、「バグダッド・カフェ」を、食い入るように見つめに行ったのです。

そこには……、あのときとおなじ優しいオーラに包まれた、画家ジャック・パランスの微笑みがありました。

この、日本で幻となった、「THE ^ザ ^{アイボリー} ^{エイプ} IVORY APE」の台本では、最初 Jack Palance 扮する狩猟家マーク・カザリアンが、わたしの扮する白いゴリラを撃ち殺す役になっていたのですが、急遽、それも撮影に入ってからだったと思うのですが、ジャックの要望で?、それが止める側の役が変わったのです。

それが、ジャック・パランスという、あの時からわたしの^{てのひら}掌に残る、大きくてごつくて優しい、暖かな掌の持ち主の、その人柄そのものなのだと思います。



—後編—

第七話 <大抜擢>

こうして、円〇プロとアメリカのRプロとの日米合作を撮り終えたわたしに、円〇プロから「次のマンを、是非、瀬崎でやりたい」という一段高いレベルの夢のようなお話を頂いたのであります。

少年時代のヒーロー “ウルトラ〇〇、

その子供達のヒーローに、抜擢されてしまったのです。

その瞬間、自分の中に鬱積していた、芸能界に抱く暗がりの中から眩い光が放たれたかのようなようでした。

今度こそ、作品としての、生涯に残るであろう仕事が巡り来たのだ！！

今、思い返せば、それは、バミューダーから還ってくるなり急速に襲って来たリアルな現実感を、すっかり吹き飛ばしてくれるような衝撃的な出来事でした。

なにしろ、人生の中に一生涯刻まれるであろうヒーローになるのです！！

きっと自分の演じる “U、も、それを見る少年にとっては、生涯、心に刻まれるであろう物語になるはずのものでした。

“U、には、いつの時代であっても、『そんな存在であって欲しい！』という、作る側と、見る側で創り上げる力強い姿がありました。

頂いた話では、何年ぶりかの “U、だから、円〇プロも相当に力を入れるらしい……とのことで、先ず、ゴリラの時のように、全身の石膏取りから始まり（だったと思うが “U、の時は顔のみだったかもしれない）、スーツはわたしの体にぴたりと合わせた厚手のダイビング用のもので、三着用意されました。

このスーツを身につけるときは海パン一つで、全身にベビーパウダーをまんべんなく擦り込み、ぴちぴちのスーツを指でつまみ上げながら身体を潜り込ませてゆくのですが、全身を潜り込ませ、大きく息を吸い込み胸を張って立ち上がったところで、背中中のジッパーを上げて——“U”になる。

もはや、自分が自分でなくなり、特撮中のヒーローと化す。

知らなかった力がそこに漲るのです。

制作スタッフがこの作品に込めたものは——、
「セットや、カメラ技術の全てを一つの現場でぶつけ合い、CGは一切用いず、ものの質感に徹底的にこだわって作り上げるところにあります」と、
……そのお話を、密かに“U 8 0”の大ファンだったという友人から戴いた、放映30周年記念番組“U 8 0”のすべて（スターチャンネル・ファミリー劇場、長谷川初範出演）のDVD中で、特撮カメラマンであった方や、プロデューサーの方が熱く語っていらっしゃるのを見て、『そうだったのか!』と、納得しました。

なにしろ、その作られた造り物の頑丈なこと。
ビルなんか、全力でぶつからないと、全然壊れてくれないのですから。
——もしも、失敗したら、一ヶ月も幾らも掛かって美術の方が丹精込めて作り上げた作品が、台無しになってしまうのです。

そのとき……、特撮スタジオ（倉庫?）の横に累々と積み重ねられた毀れた模型やセットを見せて頂きながら、責任感に震えて——、ビルに向かって飛び込んで行ったあの日のことを思い出しております。

第八話 <こんどの“U、は八頭身でなきゃ駄目なんだ！>

“U、のスーツは、以前、デパートのショーでも着けたことがあったのですが、撮影用はそれとは異なりました。

わたしの骨格から採ったマスクはわたしの顔とぴたりと一つになり、目の下の覗き穴は、カメラにばれないように極端に小さくできていて、しかも、隠れたスイッチで目に光が入ると視界は無いに等しい。

そんな状態で怪獣との立ち回りを演じるのだから、怪獣がどこに行ったのか、自分がどこを見ているのかも分からなくなる。

怪獣がそのことを心得て動かないと、とても見られる絵にはならない。さらに、その呼吸のできないつらさは、装着して少し動いただけでも息が上がるほどだ。

そしていよいよクランクインの一ヶ月前。特撮監督Tさんの前で、スーツを着けた“U、がポーズをとった。

監督ははじめから腕を組み、椅子の背に体をのけぞらせながら渋い表情であったように思い返す。

「んー、……駄目だな。足が短いよ。今回の“U、は黒人のように8頭身でなきゃ駄目なんだ！ 足が太いんだよ。」

監督のこの一言で、6.5頭身だったわたしは降板となり、替わりに、日本人離れしたA氏が抜擢されたのでした。

その後、怪獣のオーディションがあり、そこで選んでいただいたのですが、そのときに一緒にオーディションを受けた他の

事務所の人が、

「おめでとう！ よかったね。頑張ってください！」と手を握ってくれたことに、思わずむっとなる。

「くっそー！ “U、に負けない怪獣になったる！！”

第九話 < “U” の素顔 >

A氏は、わたしより二つほど若くて、当時18歳か19歳だったと記憶している。

顔は映画俳優になってもおかしくないようなイケメンで、足もすらりと長かった。

業界では、年齢に関係なく先に入った人に絶対的な権限が与えられる。

わたしはたびたびそのことに戸惑った。

しかしA氏は、わたしの先輩でありながら威張ったようなところが全然なくて、事務所が違っていたせいもあってか、撮影が終わって一緒に風呂に入ると、二人の体にこびりついていた風呂の底に溜まったセメントの粉を掬い上げては笑いあったものだ。

ひょっとして、そのときA氏の漏らした
「とてもじゃないですけど、一分はもたないですよ。」
……だったのかもしれない。

セメントの粉は、撮影中の爆破シーンで飛び散る粉じんで、また、戦闘機から打ち込まれるミサイルは打ち上げ花火のようなもので、怪獣にぶつかったあとに火花となって覗き穴（シャ）の中へ飛び込んでくるのですが、小さな火傷など気にしてられない。

特撮の現場で自分の都合でシーンを止めるなんて考えられなかったし、目に入る火の粉さえ防ぐことができれば、後は、へっちゃらへっちゃらなんとかなるさ！ そんな勢いで撮影はどんどん進んでいく。

怪獣は“U”の三倍ほどの出番があるため、わたしはほとんど毎日が撮影所通いだったように思い起こす。

一度、ほかのスタジオで学園ものを撮っていたわたしの高校時代の憧れ、中村雅俊氏と、食堂のテーブルで向かい合わせになり、挨拶を交わしたことを思い出す。氏は、カツ丼とカツカレーか何かを平らげていた。

わたしが“U”に携わらせて頂いたのは約三ヶ月間でしたが、毎日毎日遅くまで閉ざされたスタジオの中に籠もり、埃と汗と涙にまみれて仕事に打ち込むスタッフの熱意とはいかなるものだったのでしょうか。

その、茶の間からは想像もできない過酷な現場で生み出されていくものこそ、僕らが、少年の頃に憧れた“U”の魅力の神髄なのかもしれない。……とは、時が経つにつれ思うことです。

今だからこそこんなに楽しく語れますが、しかし今になっても忘れられない暗い陰の部分もあります。

それは、“U”に入った人たちのほとんどが、心臓に掛かるあまりの負担に耐えかねて、降板しなければならなかった。と、聞かされたことです。

わたしが芸能界を去って数ヶ月後、“U”の中身が、A氏ではないことを知りました。

その真相は、憶測に過ぎませんが、もしわたしがその中身であっていたら、同じことになっていたかもしれない。という思いは重く、しかし……そこから逃れようとも、考えられなかったに違いありません。

そうなると分かっている、避けられないことがあるのだと思います。

しかしそれがその先どのような出来事に繋がって行くかなんて、誰も、識ることなんてできないのです。……とは、今、つくづく思うことです。

第十話　＜故郷へ＞

芸能界に見切りをつけた自分の前から、希望であったものの全てが姿を隠してしまったかのようでした。

わたしは失墜の思いで、公務員を定年退職してシロアリの消毒会社を興した父を手伝うために帰郷しました。

わたしが芸能界へ飛び込んだのは『スタントマンになりたい！』その一念からだったのですが、当時日本には（今はどうかはしりませんが）わたしの考えているようなスタントマンという制度が何も確立しておらず、保険も保証もなかったために、危険なことをしようとすると「おまえがやると現場の迷惑になるから言われたことだけやってろ！」と怒鳴られていました。

子供心に観た、ハリウッドスター達を、見えない陰の部分で支える真の立役者。

それがわたしの抱くスタントマンの姿でした。

わたしはその存在に強い憧れを重ねて見ておりました。

三歳の頃から、どもるようになったわたしは、人前で発表することがとても苦手で、しゃべろうとすればするほど言葉がのど元で膨らんだまま出てこなくなりました。

しかしそれとは逆に、運動に関しては自信があり、みんなの前でお手本になることもしばしばありました。

中学に進んだわたしは、小学六年のときに作文に書いた、オリンピックで金メダルをとることを夢に描いて陸上部に入部しました。

ところが、その陸上部に、とんでもなく足の速い男が現れて、彼は違う小学校から来ていたのですが、わたしは同じ学年の男子に、このときはじめて負けてしまい、その事実を受け入れること

ができないまま走り幅跳びに転向しました。一方、彼は、走る度に市の記録を更新してゆきました。

一番、自信のあった特技で味わった敗北。
……そのときから、この何ともたえようのない無力感が、わたしの中に棲みつきはじめ、このときから、わたしは、真に自分を輝かせてくれるものを探し求めはじめました。

『自分とは一体何なのだ！』

この、容赦なく襲ってくる不安を打ち消すために、異性に、恋愛に、逃げ道を求めました。

しかし――、

想っても、想っても届かぬ思い。

願っても願っても叶わぬ恋。

このときに負うことになった心の穴は、その先に進むために、避けては通れない、道の上での必要であったように思う。

わたしはその頃から、暗い穴の中で見つけたことばの断片を拾いあつめ、詩のようなものを書きはじめました。

それはとても『詩』などとよべるようなものではなかったのですが、自分の中で暴れる感情を、なだめすかしてくれるものになりました。

わたしは、センチメンタルな思いにどんどん惹かれてゆきました。

ミッシェル・ポルナレフ。カーペンターズ。Simon & Garfunkel。

井上陽水……。その音楽に、詩に、心惹かれ、思いを委ねてゆきました。

こうして、自分が何者であるのかを問いはじめる13、14、15の歳を迎える、これからの仲間たちも、見えない巨大な壁の前で立ちすくみ、自分の位置さえつかめない……。不安と希望の渦巻くアンバランスな中で、さまざまな思いを味わって行くことになるに違いありません。

それこそが――、わたしの演じた怪獣“ホー”の、ありのままの姿。だったのかもしれませんが。

第十一話 <はじまり>

“ホー”は“U”の必殺技“BKビーム”で敢えなく消え去り、物語の中の少年の思いも長谷川初範氏演じるY先生の助けによって心癒されてゆきます。

しかしわたしの方は、棲みはじめた暗がりのなかで藻掻きつづけておりました。

昼は父のシロアリ消毒を手伝ながら、深夜の喫茶でコックのアルバイトを始めました。

行き場を求めてあらゆる表現手段を試みました。

深夜喫茶が終わるとそのまま山奥に分け入り、発声練習をはじめました。

ギターを求め、電子ピアノも買いました。

そしてついには、ライブハウスに勤めてシンガー・ソングライターの真似事をしていると、「客より音痴な人は歌わないで」と言われ、自分が音痴であることに気づかされて、その道をあきらめました。

そうしながら数年が経った24歳のときに、床の中で、突然、夢とも現ともつかない状態になり、“ことば”や“イメージ画像”が駆けめぐりはじめました。

それは、思い浮かんだことをメモするときの感じとは明らかに違って、

それは――、めくるめく鮮やかな色彩と形を伴う姿で現れ、それを書き記すまで消えてはくれませんでした。

そんな出来事が二〜三ヶ月（記憶が曖昧）続いたのでしょうか。気がつけば、メモは小さな文字でびっしとノート数冊（たぶん）になっていて、その頃には、ばらばらに記されたことばや絵のつながりが、一つのビジョンになって見えていました。

それは、誰もが望む、誰もがしあわせになれる世界の実現。…

…である、と思えました。

しかし同時にそれは、自我が目覚めてぶち当たる、ぶ厚い巨大な壁の正体である。とも感じました。

人種、肌の色、言葉、習慣、文化、宗教、性の違い……で、争い、^{いが} ^あ 喧み合い、殺し合にまで及ぶ、その根本に居座っているものとは？

『愛したい。のに、愛せない。』その、自分のこころの奥底に棲みつく、相容れないものの葛藤！

なぜ、人種や、肌の色や、言葉や価値観に、違いが生まれたのだ。

なぜ、男と女に分かれてしまったのだ？

その違いを乗り越えるために、芸術や宗教が存在するのではないのか！

なのに、なぜ世界には、苦しみが充ち満ちて、溢れているのだ！？

——しかし、この見えない壁を乗り越えられるのも、間違いなく、他のなにものでもない、この、自分という、人間であるはずなのだ！！

わたしは、ノートに記された散り散のことばを拾い集め、つなぎ合わせてゆきました。

そして半年後、それは一冊の冊子になりました。

しかし、このとき出来上がった冊子の内容は、親をはじめ、誰の理解も得られものにはなりませんでした。

それどころか、「お前の考えを押しつけないでくれ。逆に苦しくなる！」と言われました。

なんということだ、自分が苦しみの中から見つけ希望は、友人にすら届かない……

その落胆は激しいものでした。

しかし、その状況の中で、はっきりとした目標も得ました。

『この文章に表したかった内容を、生涯かけて表現してゆこう！』

今思えば、このとき、自分の中の思いをつなぎ合わせた断片が、初めて発した、拙い“ことば”のはじまりであったのかもしれませんが。

わたしは、扉を、知らずに押し開けておりました。

2026 年 9 月 17 日改訂



作者：N.A さん

特撮怪獣ファンの友人、n.aさんからプレゼントして戴いた、
泣き虫怪獣「ホー」の切り絵。

—参考までに—

・NBC長崎放送《窓をあけて九州》2004年10月10日放送 “ウルトラマンになれなかった男、

・「THE IVORY APE」で検索すると、あらら、見つけちゃいました！ ゴリラのアップショット。